九州ルーテル学院大学

Teaching Portfolio

2026

所　　属：　　人文学部人文学科　児童教育専攻

名　　前：　　本田　裕紀

ティーチングポートフォリオ

作成日：2026 年 5 月 28 日
教員氏名：本田　裕紀
所属：人文学部　人文学科　児童教育専攻

１．はじめに

これまで学校現場２７年、教育行政１１年、初等中等教育に携わってきた。その中で、教育実習生等へ教師力向上を目指した指導にあたるとともに、若手教員の人材育成に努めてきてきた。また、学校管理職としては校長として、ＩＣＴ端末を活用した子どもが学び取る授業改善を学校全体として推進していくとともに、校内研修を中心に教師同士が学び合う研修を通して教師自身が自ら授業力を高めていく取り組みを行ってきた。

今後、変化の激しい時代に対応した教師を育成していくことは大変重要である。これまでの自分の現場での経験を活かして大学での理論と学校現場での実践を往還し、現場に強い教師を育てていきたい。

２．教育の責任

九州ルーテル学院大学での担当は人文学部人文学科児童教育専攻における専門科目の担当である。特に小学校教員免許状の取得を目指す学生に対する教育を中心に担当している。

自分自身が実務家教員として学校現場の状況を適切に伝えていくとともに、学校現場での実習や大学との連携がスムーズにいくように努めていく。また、行政や地域との連携も図りながら学生も一緒に取り組むことができるようなプロジェクトを積極的に推進する。

(1) 授業科目の担当

２０２６年度は以下の科目を担当予定である。

科目名	開講時期	履修者数（２５年度）	備考
教職論	２年前期	57	専門教育
教育方法	２年前期	57	専門教育
教育経営学	３年前期	51	専門教育
ＩＣＴ活用指導論Ⅱ	４年後期	31	専門教育
小学校教育実習Ⅰ	３年前期	43	専門教育
小学校教育実習Ⅱ	３年後期	43	専門教育
児童教育フィールドワークⅠ	４年前期	24	専門教育
児童教育フィールドワークⅡ	４年後期	36	専門教育
特別研究	３年後期	8	専門教育
卒業研究	４年通年	9	専門教育

■主要担当科目

「教職論」

教職に関する歴史的経緯、法的環境及び今日的課題への考察を通じ、教職の意義や特徴、教員の役割や求められる資質能力について理解する。また、教員の職務内容について、学校教育全体における教員としての児童への関りのあり方への考察を深めるとともに、いじめ問題や事故・災害等の危機問題への対応についてチームとしての学校運営（他業種との連携を含む）のあり方を検討する。

「教育経営学」

教育に関する社会的事項として、学校を巡る状況や子どもの生活の変化に対する教育政策の動向等を学ぶとともに、経営的事項として学校や学級の経営、PDCA サイクルの重要性を学ぶ。さらに教育経営として重要な地域との連携・協働、学校安全への対応のあり方等の認識が深められるようにする。

「教育方法」

授業とは何かを、その本質や方法論について学び、具体的な教育の技術を理解して指導案を作成できるようにする。また、情報機器についての基礎的な活用方法について学ぶ。

「児童教育フィールドワークⅠⅡ」

次年度より学校現場で働くための専門的・総合的な知識および実践力を身に付けることを目的としている。そのため、学校現場と大学とを往還し、大学において小学校での体験のふり返りを行う。

(2) 教育組織運営

2024 年度からＩＲ・情報委員会のメンバーとして学内業務に従事している。

３．教育の理念

確かな理論に基づく専門性と柔軟な実践力を兼ね備えた教員の養成を目指し、教育を行っている。専門性と実践力を相互に関連し合えるように日々の教育活動において、個々の学生がそれらを相互に関連付けることができるようになるための教育を目指している。また、社会の仕組みが大きく変化する現代の状況において、自らが問題を発見し解決する力を重視する教育を目指している。

(1)理念１　主体的・協働的な学びの実践

子どもの学びと教師の学びは相似形と言われている。学生自身が、自ら問いをもち、主体的に学び、協働しながら学びのプロセスを経験し、それを学校現場で実践できる力を養う。

(2)理念２　学校現場との連携を重視した学び

大学の学びと学校現場を密接に結びつけ、理論と実践の往還を重視する。大学と学校が協働し、学生が学びながら現場の実情を理解し、理論を実践に活かすことができる教育者を育成する。

(3)理念３　持続可能な未来を創るための教育

well-being を目指して、持続可能な社会の創り手としての知識・価値観・態度を育む。現在、日本の学校教育が抱えている少子化、多様化・多国籍化等の課題について理解し、不確実な時代を豊に生きていく力を育む。

４．教育の方法

(1)　ＩＣＴ機器を活用した協働的な授業方法の工夫

・アクティブ・ラーニングを取り入れ、学生が自ら問いを立て、探究する機会を提供する。

・ICT を活用し、協働的な知識創造を支援する。講義資料もＩＣＴ端末と親和性があるように作成したり、オンラインでの共同編集ツールやディスカッションプラットフォームを活用したりすることで学生が主体的・協働的に学ことができるようにする。

(2)　学校現場における実践や資料の活用

・「フィールドワーク型教育実習」の推進：長期間の現場観察やチームティーチングを通じて、学校の課題を体感しながら学ぶ。

・「学校インターンシップ制度」の強化：大学在学中から学校に関わり、教員の実務を経験できる環境を整備する。特に学級経営、児童の学習方法、支援が必要な児童のサポートに役立つスキルを学ぶ。

・大学と地域の教育委員会・学校との協働を深め、学習指導案作成や研究授業に学生が参加する機会を増やす。

(3)　実社会につながる問題解決的な学びの工夫

・学生が地域社会と関わりながら、社会課題を解決するプロジェクト活動に取り組む機会を提供する。

・学校を巡る近年の様々な状況の変化を理解し、教育のあり方について自ら考える機会を持つ。

５．教育改善のための努力

(1)改善努力１

授業評価アンケートは概ね良好であったが、一部の講義で、課題に対しての教員からのコメントが十分ではなかったとの指摘があった。毎回の教員からのフィードバックを充実させることはもちろん、教員からの一方的なコメントだけなく、双方向のやり取りを工夫し、学生の学ぶ意欲を向上させる。

(2)改善努力２

日々変化する学校現場の状況や指導のあり方について、教員として継続的なアップデートが求められる。学内外の研究発表や研修等に積極的に参加し、自分自身の知見や指導法について幅を広げることができるよう努力していく。

6.　教育の成果・評価

大学における講義の内容について、学校現場に出た時に生きて役立つように教科指導、教科

外指導（生徒指導・特別活動等）において必要な事柄を整理して扱っていくようにしている。このことに関しては一定の成果が上がっていると考えられるが、今後さらにアップデートしていく必要性を感じている。

７． 今後の教育に関する課題と目標

大学の学びと学校現場の実践を結びつけ、即戦力となる教育者を育成していく。主体的・協働的な学びを基盤としながら、学校との連携を強化し、実践的な知識を養う教育を推進することで、これからの教育現場に求められる教員像を確立していく。最近，本学だけに限らず，教職についても長続きせず，他の業種に転職する若手も増えてきている。講義だけでなく、学生のボランティアや実習、自治的な活動とバランスよく人間的な成長を促すとともに，卒業後につながるような内容をさらに吟味していきたい。

【根拠資料】

・担当科目シラバス

・授業評価アンケート結果